

# 森小路遺跡



写真■森小路遺跡から出土した土器  
穴を開けてから捨てていたとみられる

## 森小路遺跡から

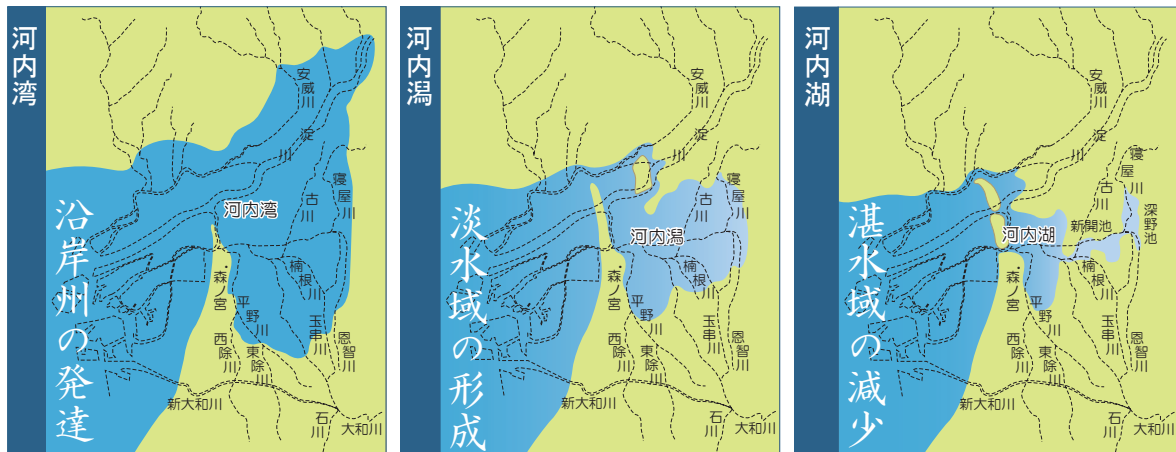
## 旭区の『弥生時代』と『古代大阪』を知る

### 大阪の地形の移り変わり

大阪は、十万年以上昔にナウマン象がいた説がある。数万年前、今の天王寺区を含む上町台地が、洪積層の岩層地帯で大入江の大阪湾に突き出していた頃も、この後の無土器時代（交野市神宮寺や藤井寺市国府遺跡から石器出土）も、五千数百年前の縄文時代（四天王寺や西日本一の貝塚・森之宮遺跡から土器出土）前

期も、旭区は『河内湾』と呼ばれる大阪湾とつながる海の中にあった。

大阪は四千年前～三千年前に上町台地の先端から砂州がのび、淀川から運ばれた土砂により塩分が減じ『河内潟』そして『河内湖』へと順に陸地化していった。



図■大阪平野の移り変わり

## 旭区最初の住人たちの『ムラ』の跡

約二千年前の弥生時代に中国から朝鮮半島を経由して入ってきた農耕文化により、人間は山地の狩猟から農耕の低地へと移り、瀉から湖化の『河内湖』や淀川に近く、水利のよい自然堤防上の森小路に人が住み始め、ムラができたと考えられている。近くには、東淀川区の崇禅寺遺跡、東大阪の高井田遺跡、隣接守口市の八雲遺跡などがある。東住吉区の桑津遺跡、平野区の瓜破遺跡、南河内の貴志遺跡からも農耕遺跡が出ている。



### 郷土史料室

区民センター内の郷土史料室で、出土品や復元模型のパネル展示がされている。弥生当時の様子をはじめ、その後の森小路遺跡など旭区の歴史を学ぶことができる。

写真■ムラの跡



## 弥生時代の主な出土品

弥生時代は日本列島内で、稲作農耕が行われ、米を主食にした最初の時代であった。森小路遺跡でもこの地で稲作が行われたことを示す石包丁（稲の穂を摘み取る石器）や木製の鋏・臼などの農具をはじめ、籾跡の見える土器などが出土している。

また、弥生時代には戦争があったといわれており、森小路遺跡でも当時の武器とみられる石鏃や石槍をは



じめ、戦争か祭りに使用したと思われる磨製の石戈（刃の先状）も出土している。モニュメント住宅の柱穴跡をはじめ、貝塚には淡水のシジミやハマグリなどの貝殻が出土している。土器・石器・木器などの生活用品のほか、ムラはずれでは甕も出土し、方形周溝墓などもあったと推測されている。水田跡は特定されていないが、ムラ周辺部の低湿地と考えられている。

## 弥生時代の森小路遺跡

森小路遺跡は、淀川南岸の自然堤防上に人が住んだムラ跡で、海拔2.5～5メートルの低層（平地）遺跡として貴重である。

弥生中期と古墳中期の出土品は多数あるが、弥生後期から古墳前期の出土品はなく、その間森小路の人々は、河内湖や淀川の洪水被害のため移動したと推測されている。その後人々は、海から海への交通の要所で、大陸文化の受け入れや物資交流の盛んな所に定住し栄え、農耕地の開拓により強大化したと考えられている。

現在住宅地の新森4～5丁目付近では、地面をわず

か1メートル掘り下げた道路工事や調査（約100件）時の砂層から、6世紀頃のもの、榎並の庄の荘園期のもの、室町期のものが出ている。

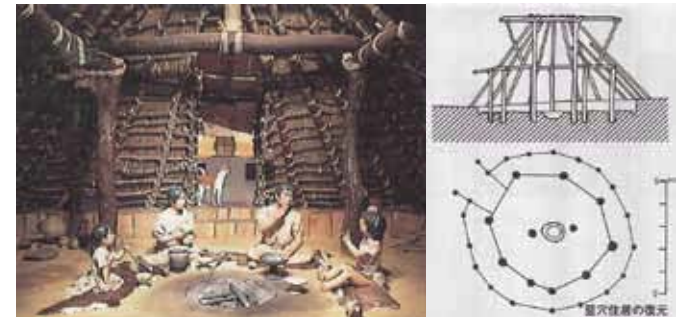
## 森小路遺跡の発見・調査



写真■新森中央公園の碑（上）と新森中央公園の説明板（下）

森小路遺跡は、昭和6年（1931）の土地区画整理の際に発見された主として弥生中期の集落遺跡で、古墳時代、さらに飛鳥・奈良時代のものまで出土した、大阪市顕彰史跡である。遺跡の範囲は、現在の新森中央公園を中心に、半径300～400メートルにわたると

写真■弥生時代の生活 図■竪穴式住居の復元



考えられている。

大阪市は、昭和49年（1974）から遺跡調査を始め、下水管やガス管等の敷設工事とともに、その後の家屋の立替増加時に先立つ調査も行われた。

### 森小路遺跡の主な調査地点

